

巡ってきた幸運

Wedge White

それは、妾が悠との生活を始める少し前のこと。

以前までいた家を離れ、新たな憑く先を探していた妾は、なんとなく街を歩き回っていた。

妾は、”そうであることが自然なこと”として、人混みの中に紛れ込むことができる。そのため、ほとんどの人間に存在に気付かれることすらないし、仮に会話をしたとしても、ほんの一瞬後にはその記憶も忘れ去ってしまう。

それは少しだけ寂しいが……でも、それが座敷童というもののだから、と受け入れていた。
「うわあっ……!!」

入った先のビルの一階。薬局で若い店員がいくつもの段ボール箱を抱えて歩いていた。そして、鈍臭いことにバランスを崩し、一番上の箱が滑り落ちてしまいそうになっている。

「……仕方がないのう」

妾は店員に駆け寄ると、軽く飛び跳ねて、滑ってしまいそうになっていた箱を押してやった。
「あ、あれ？」

すると、すぐに彼自身でバランスを立て直して、滞りなく運んでいく。

店員は妻に気づくことはなく、少し不思議そうにしてはいたが、自分の力で立て直せたのだろう、と自分の仕事を続けていた。

特定の家に憑いていない時の妻は、こうやつて人並みの行動で小さな幸せを与えることしかできない。

それでも、たとえ気付かれなくとも、妻がいることで人の生活が少しだけ上手いくのなら、それでいい。

ただ、この状態の妻ではできることもある。たとえば……。

チャリーン！

小銭が落ちた音が響く。響くといつても、たつた数枚の小さな硬貨が落ちた程度の音だから、近くにいる人間にしか届いてはいないだろう。

薬局の会計を終えた老婆が、財布に小銭をしまい損ねて落としたのだろう。老婆は目か耳が悪いのか、それに気付くこともなく店を出ていこうとしてしまう。

こんな時、相手が若者であれば妻が小銭を拾つてやり、再び目の前に転がしたりする。

ただ、自ら落とした小銭に気付かない老婆が相手では、それをやつても効果は薄いだろう。だからといって、直接相手に渡すというのは……少し違う。

どうせ妻は忘れられるだろうが、そこまではつきりと特定の相手に干渉するというのは、家に憑いていない状態であることではない。

別に座敷童はかくあらねばならない、という取り決めがある訳ではない。しかし、それが妾がなんとなく持つてゐる……矜持のようなものだつた。

妾は人間が好きだ。どんどん人間の役に立ちたいと思う。しかし、妾は人間ではない。人ではない者が人の世界に干渉し過ぎるのは違う……そう思う。

それに、老婆が落とした効果は小さな銀色のものが二枚に、茶色のものが一枚。合計でたつた12円。

近年、老人のもらえる年金が減つてゐるらしいことは、前の家にいた頃に知つたが、だからといってその12円が老婆の生活に直接的な影響を与えることはないだろう。このまま誰にも拾われずにいれば、いずれ店員が掃除するだろうし、その12円を積極的に求める者もいないだろう。

ならば、と妾はそれを見過ごすことを決める。ただ、少しだけ悪いことをした気持ちになつて。——だが。

「あ、あの、落とされましたよ」

小さな男の声が聞こえた。振り返ると、今の学校制度で言う大学生ぐらいの男子が、老婆に声をかけているところだつた。

とはいへ、全くの他人が相手で緊張しているのか、声はどもり、震え、小さい。耳が遠いであろう老婆には届かず、構わず行つてしまいそうになる。

さて、この男子はどうするのだろう？少し意地悪な気持ちで様子を見ていると、すぐに男子は床に膝を突き、散らばった小銭を拾い上げると、老婆に駆け寄っていた。

「お金、落とされましたよ！」

今度は大きめの声で言つたのに、それでも老婆には届かないらしい。

仕方なしに軽く肩に手を置き、振り返らせると、その手に小銭を握らせた。

「落とされましたよ」

「ああ、ありがとう」

「いえ……」

そして、目的を果たすと逃げ出すように出ていった。

「…………面白い男子じや」

なんともシャイで、それでも真面目で。たつた12円のためだけに、知らない相手に声をかけるのなんて苦手なのに、声を振り絞り。まるで悪いことをしたように去つてしまう。

その姿が可愛らしく、微笑ましく……そして、妾が幸せにできなかつた人間を助けてしまつたその姿が、少しだけ眩しくて。

妾は彼に興味を持ち、それからしばらく遠巻きに彼を見守ることにした。

すると、様々なことがわかつた。

試験の日だから、と早めに家を出たはいいが、途中で通学に使つてゐる自転車のチエーンが

外れ、それでもなんとか駅に着いたかと思えば、乗ろうと思つていた電車が後少しのところで行つてしまふ。そして結局試験には遅れてしまった。

また別の日には、アルバイトをしていて。まだ不慣れながらもなんとか仕事をこなしていると、面倒な客の対応をすることになり、精神的にボロボロになつて、仕事でミスが増えてしまつていた。

違う日には、最近の若者がよくやつているソーシャルゲームというもので、今までずっと溜めていた“無料石”を全て使つたのに、目当てのものが手に入らなかつた……と、これは割と誰でもよくあることかもしれない。

とにかく、その男子は何かと不幸で。しかし、自分が不幸なのに、変に他人にお人好しで。損な生き方をしているのう、と思わず顔が綻んでしまうことが何度もあつた。

——だから。

「夕方には雨が降り出すと、朝の予報の時点で出ていたはずだがのう？」

ある雨の日。コンビニに入つていつた男子を追いかけ、そう声をかけた。

今度はこの不幸な青年を、妻が幸せにしてやろう、と。

「どう訳じや。情けは人の為ならず。あの時の12円が巡り巡つて、妾という幸運を連れてきたんじやな。ふふつ、人に親切するものじやな？」

「まあ、な。でもまあ……ふつちやけて言えば、桐に対して使つたお金を考えたらすゞい額になつてゐるけど」

「な、なんじやと!? 妾の可愛らしい姿を毎日見れるのじやから、食費や服の代金ぐらい安いものじやろう!!」

「ああ、そうだよ。……ありがとうな、桐」

「ふんつ、わかれればよいのじや、わかれれば。……妾こそ、そなたに出会えて本当によかつた。こんなに共に過ごしていく楽しい人間は、あの女子以来じや」

「これからも妾は、悠と共に過ごしたいと思う。たとえそれが、妾に傷を残したとしても。人の子の一生は短いのじや。後悔はしないようにするんじやぞ? 妾も、決して後悔はしないようにしてゐるのじや」

それが妾というものなのだから。

巡ってきた幸運

2019年12月 5日 初版

奥付

著者 Wedge White

URL <https://wedgewhite-team.wixsite.com/home>

E-Mail konjyoyasuhiro@gmail.com

本書の無断複製、複写、転載を禁止します。

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
[\(http://tokimi.sylphid.jp/\)](http://tokimi.sylphid.jp/)